

# 畑作に関する新品種・新技術(2021年3月発表)の紹介

## ■ 小豆新品種「十育 170 号」(普及奨励)

小豆の土壌病害である茎疫病(レース1、3、4)、落葉病(レース1、2)、萎縮病に対して抵抗性を持つ普通小豆です(表1)。成熟期は「きたのおとめ」「エリモ 167」並みで、収量性は同等からやや優り、耐倒伏性に優れています。茎疫病、落葉病の被害が発生する地域の「きたのおとめ」「エリモ 167」との置き換えを推奨します。

表1 十育 170 号のデータ(道総研)

品種名	成熟期 (月日)	倒伏 程度	主茎長 (cm)	子実重 (%)	百粒重 (g)	品質 (等級)
十育 170 号	9/17	少	65	107	14.2	3上
きたのおとめ	9/17	中	60	100	14.0	3上
十育 170 号	9/18	少	63	105	14.1	3上
エリモ 167	9/17	中	56	100	14.3	2下

## ■ ジャガイモ Y ウイルス塊茎えそ系統(PVY-NTN)による病徴と塊茎えそ症状対策(指導参考)

種ばれいしょ生産における参考となるよう、ジャガイモ Y ウイルス塊茎えそ系統の主要品種における茎葉部の病徴を整理しました(写真を北海道病害虫防除所のホームページで公開)。年次や感染世代により病徴が不明瞭となる場合があるため、種いも生産ほ場では感染世代を問わず注意して抜き取りを実施します。

## ■ コムギなまぐさ黒穂病の防除技術(普及推進)

秋まき小麦のなまぐさ黒穂病に対して効果の高い防除法を示しました。ベフランシードフロアブルの種子塗抹と適期・適深は種の耕種的対策を組み合わせるとともに、フロンサイド SC1000 倍液を 10 月下旬から 11 月中旬の根雪前に散布します(表3)。

表3 耕種的対策と薬剤防除を組み合わせた効果(道総研)

品種	は種時期・深度	薬剤防除	発病率	防除価
きたほなみ	適期・適深	防除	0.0%	100
	遅まき・浅まき	防除	1.1%	95
	遅まき・深まき	無防除	21.9%	-

※処理内容 は種時期：適期(9月18日)、遅まき(10月3日)  
は種深度：適深(2~3cm)、浅まき(1cm)  
防除薬剤：ベフランシードフロアブルを種子塗抹し、フロンサイド SC 1000 倍を 11 月 1 日に散布

## ■ 秋まき小麦の起生期からの可変追肥体系による収量の安定化効果(指導参考)

マップベース可変施肥技術を秋まき小麦の起生期に適用することで、生育不良箇所の穂数増加をもたらす、増収効果が安定します。特に登熟不良年など製品歩留まりが低下する場面では、可変追肥を起生期に適用すると製品歩留まりが一律施肥より向上するため、製品収量向上効果が大きくなります(図1)。

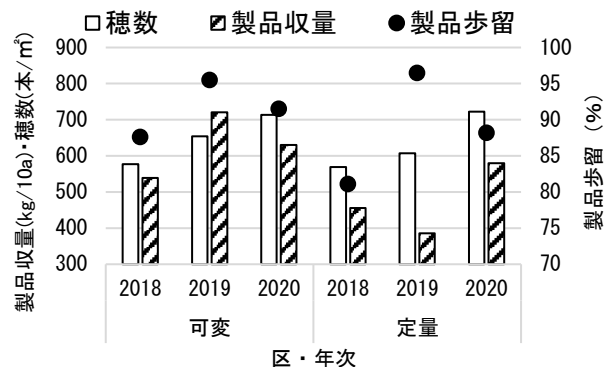


図1 起生期可変施肥の効果(2018-2020 道総研)

## ■ 早期出荷向けたまねぎの収穫前進技術(指導参考) ※注意: 移植栽培たまねぎが対象です

収穫前進効果の大きい根切り時期は品種によって異なり、「北はやて 2 号」「バレットペア」では倒伏始期、「SN-3」では L 大率 80% 期で、枯葉期は慣行に比べ「北はやて 2 号」が 2 日、「バレットペア」が 4 日、「SN-3」が 4 日前進します。根切り早期化により規格内収量は減少しますが L~L 大の規格収量は高く、2 月初旬は種やべたがけ被覆は収穫前進と減収低減に有効です。

★詳しい内容及びその他の新技術については、北海道立総合研究機構 農業研究本部の研究成果をご覧ください。

→ <https://www.hro.or.jp/list/agricultural/center/result/index.html>